

国際融合文化学会

International Society for Harmony & Combination of Cultures

ISHCC ニュースレター 第7号 (2002.09.08)

モットー: 全ての生あるものがその「生」を享受し全うしうる調和を創造すること

皆様、ご無沙汰しております。初秋の候、日増しに秋の気配が濃くなってまいりました。会員の皆様におかれましては、元気にご活躍のことと存じます。

さて、国際融合文化学会（ISHCC）は、今年度もまた秋の英語能公演を催し、研究発表大会を開催します。シェイクスピア詩劇と日本の能楽の融合作品である『英語能ハムレット』、そして私たちの仲間の研究発表をお楽しみください。その他、情報満載のニュースレター第7号をお届けします。

英語能公演と ISHCC 国内第五回大会が 10 月に堺で開催されます

本年度の ISHCC 主催英語能公演は、大阪府堺市の堺能楽会館で開催します。昨年の京都公演をご覧いただいた館主の大澤徳平様のお申し出と多大なご協力により、本年度も素晴らしい舞台で開催できることになりました。今回は間（アイ）狂言も入ります。そして、皆様が堺に集う機会にということで、翌日には学会の第五回大会を開催します。大会会場は堺駅すぐの「ホテル南海さかい」です。下記に案内を記しますので、それぞれぜひお申込みください。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

【英語能ハムレット公演】 シテ：上田 邦義（当学会会長）

日 時 : 2002 年 10 月 26 日(土) 14:00~16:00

会 場 : 堺能楽会館

〒590-0974 堺市大浜北町 3-4-7-100 ダイトクビル 1F Tel.072-238-2000

入場料 : 一般 \3,000- (前売:\2,000-)

学生 \1,500- (前売:\1,000-)

前売券申込先: TEL/FAX 072-235-0305 (大澤徳平様、堺能楽会館館主)

E-mail otokuhei@jasmine.ocn.ne.jp

大澤様ホームページの公演案内ページ:

<http://www.noh-gakudo.jp/newpage24A.Bhtm>

【ISHCC 国内第 5 回大会】

日 時 : 2002 年 10 月 27 日(日) 10:00~16:00

会 場 : ホテル南海さかい 会議室「白梅」

〒590-0972 堺市竜神橋 1-5-1 Tel.072-233-7111

ホテル南海さかいのホームページ:

<http://www.hotel-nankai.co.jp/sakai/index.html>

参加費 : \2,000-

※発表希望者、参加希望者は下記にお問合せください。

※大会プログラムについては、後日、参加申込者にご連絡いたします。

《問合せ先》英語能公演、学会大会共、下記にお問合せください。

ISHCC 実行委員

菊地善太 2001c03@gssc.nihon-u.ac.jp

安田 保 2001c17@gssc.nihon-u.ac.jp

戸村知子 2001c11@gssc.nihon-u.ac.jp

※尚、9月21日(土)にも、大手前大学西宮キャンパスにて、上田先生によるご講演と英語能のショートパフォーマンスが予定されています。ご興味のある方は上記実行委員にお問合せください。

学会誌『融合文化研究』創刊号が発刊されました

ニューズレターの第6号でご案内申し上げた当学会の学会誌、『融合文化研究』が、いよいよ創刊の運びとなりました。本年度の会費を納入いただいている会員の皆様に順次お届けいたします。楽しみにお待ちください。また、次号へのご寄稿をお待ちしております。下記は、創刊号の内容です。

『融合文化研究』第一号 目次

表紙

会のモットー

「巻頭言 すべての我々の選択にかかっている」

上田 邦義

「ソローにおける東西文明の融合化の意義」

山田 正雄

「能『羽衣』と世界の白鳥伝説、天女はどこへ帰っていったか」

竹村 茂

「芭蕉、蕪村、子規の俳句と能[その一] 芭蕉の能句(発句)」

木佐貫 洋

「能と手話詩との融合を目指して」

棚田 茂

「R.H. Blyth の研究 ―ブライスの分かりにくさについて」

杉本 京子

「シェイクスピアの独創性に関する一考察」

菊地 善太

「魂の錬金術師 ―ウィリアム・ブレイクの人と思想」

泊 敦子

「懷徳堂精神に学ぶ」

安田 保

「競争から共生・協調・調和へ」

上田 邦義

「アシュレイ・モンタギュー「現代の部族主義」

竹野 一雄訳

「ウィットマンの "Vigil Strange I Kept on the Field One Night" に関する批評」 Marcus Grandon

国際融合文化学会会則

役員名簿

原稿募集要項

執筆者一覧

編集後記・編集審査委員・奥付

会のモットー(英文)

英文目次

《問合せ先》本件についてのお問い合わせは、下記にお願いいたします。

ISHCC 実行委員

竹村 茂 2000c14@gssc.nihon-u.ac.jp

菊地善太 2001c03@gssc.nihon-u.ac.jp

三月の ISHCC 国内第四回大会（沼津）のご報告

遅くなりましたが、国内第四回大会（沼津大会）についてご報告いたします。当学会発祥の場所である沼津の「ホテルはまゆう」にて、2002 年 3 月 9 日～10 日の二日間にわたり大会を開催しました。静岡大学の染谷教授のご講演をはじめ、上田会長による能のワークショップ、学会副会長の Marcus Grandon 先生によるビデオを使ったレクチャー・プレゼンテーションなど、今回も興味深いご講演が相次ぎました。学生発表も沢山あり、大学院の昨春修了者、今春修了者、そして現役生が、それぞれ日頃の研究成果を口頭発表しました。下記に、事前にいただいた発表要旨予稿をご紹介します。

【第四回大会 発表要旨】（予稿）

氏 名	和文タイトル
	英文タイトル
	発表要旨
染谷臣道 静岡大学 人文学部 教授	未来文明学を構想するにあたって
	Toward the Construction of Hybrid Civilizations for Future Generations
	1998年の国連総会でハタミ大統領が、すべての人類の幸福を実現するためには文明の対話によるしかない、という演説は困難をきわめる現代世界に光明をもたらした。21世紀は、ますます発達している技術が諸文明の対話を促進し、相互理解が進み、共生のための知恵が出され、平和が実現する方向に進むかと思われた。戦争の20世紀に決別できるのかという期待を抱かせた。 しかし、エスカレートするパレスチナ紛争、9.11のテロ、そしてアフガン報復が無残に人々の希望を打ち砕いた。対話の言葉が飛び交いながら、現実には衝突。人類はまだこの段階なのだ。文明の対話を現実のものとしめない限り、未来はないのではなかろうか。 文明の対話を現実のものとするということは、強力な近代文明をバックボーンにしつつ、世界のさまざまな伝統文明の知恵という栄養を摂取して未来文明を構築することではないだろうか。
西岡妙子 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M2	融合文化・文学論研究－シェイクスピア能の場合－
	A Study of Harmony and Combination of Cultures and Literature －with Special Reference to Noh Shakespeare－
	宗片（上田）邦義氏の「シェイクスピア能」は、それまで誰も試みたことのない非常にユニークな試みであった。英文学の最高峰であるシェイクスピアの文学と、日本の伝統芸能である能を融合させ新しい文学、芸術を創造しようとする試みであった。 シェイクスピア作の4大悲劇をすべて英語能に翻案し、上演に際しては自らシテを舞っただけでなく、日本語口語能『能・オセロー』『創作能・クレオパトラ』『能・大僧正トマス・ベケット』の能原案を創作した。これらの能はすべて本格的な能の様式で上演されたのであった。 「シェイクスピア能」は『英語仕舞・ハムレット』に始まり、『英語能・ハムレット』（試演）、『英語能・ハムレット』（4場）、『英語能・ハムレット』（5場）、『英語能・ハムレット』（2場）、『英語能・ハムレット』（ソロ・パフォーマンス）、『英語能・オセロー』、『英語能・マクベス』、『新作能・オセロー』1、『新作能・オセロー』2、『新作能・オセロー』3、『英語能・リア王』、『創作能・クレオパトラ』と発展した。「融合文化・文学」が文化や文学を語る際のひとつの視座となることを期待したい。

杉本京子 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M2	Reginald Horace Blyth の研究 一二つの “What is Zen?”
	A Study of Reginald Horace Blyth With Special Reference to Two “What is Zen?”
	この修士論文は、ブライスの <i>Zen in English Literature and Oriental Classics</i> (1942)と <i>Zen and Zen Classics, Volume One</i> (1960)の第1章が共に “What is Zen?” となっていながら、その論調が非常に異なるので、その両者を比較し考察を加えようとしたものである。前者は鈴木大拙から学んだ禅の精神がイギリス文学に見出せることを指摘し、禅との共通性を見ようとするものであった。そこには弾むような喜びが感じられた。これが後者になると「悟りをひらいた禅僧は他人の苦しみがわかるのか」「禅は救いを求めるものを地獄へ付き落としてから救済する」など、論調は一転していた。前にあれほど絶賛した“無我”にこそ問題があると言い、禅で重んじる“直観”ほどあやふやでいい加減なものはないなどと言っている。なぜこんなに変わってしまったのか。禅を批判していることはわかって、何をどう批判しているのかが掴み難く、私なりの解釈を大胆にしてみるより他なかった。今回は後者の “What is Zen?” を中心に私の考えたことを発表したい。
安田保 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M1	謡曲『江口』を構成する2つの物語 — ワークショップをより楽しむために —
	To Enjoy Workshop: Noh Singing <i>Eguchi</i>
	ワークショップを楽しむための予備知識として、謡曲『江口』が作られた背景を紹介します。 "江口の君"にまつわる2つの挿話を中心に考察したい。
川田基生 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M1	『能・ハムレット』の原曲としての『江口』 —— 材源からのアプローチ ——
	The Sources of <i>NOH HAMLET</i>
	『能・ハムレット』の原曲としての『江口』について次の3つの視点から考察したい。 (1) 世阿弥による複式夢幻能成立の軌跡をたどりつつ、そこにおける『江口』の位置を確認したい。その上で、夢幻能『能・ハムレット』との関係を探り求めたい。 (2) 材源の材源としての西行上人と江口の遊女との歌のやりとりの考察。 (3) 『江口』における世阿弥の叙景を夜明けの白のイメージとして論究したい。
上田邦義 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 教授	ワークショップ 謡『江口』
	WORKSHOP: Noh Singing <i>Eguchi</i>
	ワークショップとして、能の『江口』の謡をやります。
木佐貫洋 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 修士	芭蕉・蕪村・子規の俳句と能
	Haiku and Noh of Basyou, Busonn, Shiki
	芭蕉・蕪村・子規は、それぞれの時代において俳句（発句）の革新に力を注いだ人達である。当然、彼等は多くの俳句を詠んできた。芭蕉は1,720句（芭蕉が詠まなかつたかもしれないという疑義ある句も含める）、蕪村は2,907句、子規は23,647句である。 その中で「能」に関する句は、芭蕉は27句、蕪村は56句、子規は72句余りである。是は私が恣意的に選んだものであるので正確ではない。抽出したそれぞれの能句以外にも関連するものがあると思われるが、これらの能句の数字は、各参考文献から

	能に関する「注」を施してあるものを取り出している。 彼等三人の能句は多いか少ないかは主要な問題ではない。どのような形で能を俳句(発句)の中に取り込んでいるかが重要なのである。 三人三様の形で能を俳句に詠みこんでいるわけであるが、共通した表現方法もあれば、明らかに異なった詠みかたをしている点もある。それぞれの生き方のスタンスが能俳句の詠みかたにも大きく、また微妙に影響を与えている。 それぞれの能俳句の詠み方を一言で表すとするならば、芭蕉は求道的な能俳句であり、蕪村は楽しみの能俳句であり、子規は日常的能俳句と言えるかもしれない。本発表は芭蕉・蕪村・子規の生き方と、能俳句の創作のあり方の関連を論証するのがその趣旨である。
川田基生 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M1	シェイクスピア『シンベリン』に関する一考察 —— SONG の歌い方をめぐって —— An Inquiry into the Nature of the SONG in Shakespeare's <i>Cymbeline</i> 英詩の歴史的展開におけるシェイクスピア詩の考究。古英語期は700年～1150年。中英語期は1150年～1500年。近代英語は1500年～。語彙と文法は断絶している。しかし、強勢と音節のパターンは一貫しているという。1行4強勢は民族のリズムなのだろうか。だとすれば、民謡、子守唄で歌えるはずである。シェイクスピア『シンベリン』劇中のSONGを皆さんとともに歌いつつ英米の民族のリズムについて考察をすすめたい。
菊地善太 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M1	英語能 ―日本の伝統芸能から世界の芸能への脱皮 Noh in English - Toward the International Art from the Japanese Local one 明治以降、フェノロサやパウンドを通して世界に紹介された能は、今や世界文化遺産として国際的に認められるようになった。しかしながら、能は、日本の伝統芸能として鑑賞されることはあっても、それを丸ごと自国の文化の中に受容していく動きは残念ながら未だに大きな流れに無い。かつてイエイツは、能という劇形式に大きな衝撃を受け、自らアイルランド詩劇に能を融合させた新しい詩劇を創造していったが、第二、第三のイエイツはいずこにいるのか？ 本研究発表では、能が日本の古典芸能の殻を破って世界の芸能に脱皮しようとしていることを検証したい。筆者は、宗片が考案した英語能は、能の国際化に大きく寄与するであろうと考える。
宮西ナオ子 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 M1	融合意識と至高体験 ——Unity Consciousness and Ultimate Experience—— 今、世の中はめまぐるしい勢いで変化している。新しい価値観が生まれ、古い価値観がくつつがえっている。今までの経済システムや教育システム、考え方や生き方の変革を求められている。このような時代にあって、私たちは、どのように生きたらよいのか、全宇宙的な規模での価値観を考えるにあたって、私たちは、自らの生き方を問い直さなくてはいけない時期にきているようである。そのキーワードになるのが、「融合」という意識のあり方ではないだろうか。
Marcus Grandon 日本大学大学院 総合社会情報研 究科 講師	レクチャープレゼンテーション 「マルチメディアとアカデミックワーク」 Multimedia and Academic Work I would like to do a presentation entitled: "Multimedia and Academic Work".

役員改選について

上記の第四回大会の折に、上田会長から役員改選についてご提案があり、当日参加した役員の全員一致のご賛同を得ました。下記の役員体制にて今期の学会活動を進めております。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

【2002 年度学会役員】

《名誉会長》

瀬在 幸安 日本大学総長

《顧問》

秋山 正幸 日本大学常務理事

福田 陸太郎 東京教育大学名誉教授

岡本 靖正 東京学芸大学学長

日江井 榮二郎 前明星大学学長

Doljintseren Badam-Ochiryn モンゴル大統領外交顧問

《参与》

加藤 義喜 池田 憲彦

《名誉会員》

Dorj Daicha Adiya Yumdal 観世 榮夫 津村 禮次郎 野村 万作 毛利 三弥

《会長》

上田 邦義

《副会長》

竹野 一雄 寺崎 隆行 Marcus Grandon

《事務局長臨時代行》

菊地 善太

《事務局次長》

竹内 正人 棚田 茂 木佐貫 洋 竹村 茂

《運営委員、会計監査》

五十嵐 雅郎

《運営委員》

岡田 恒雄 片山 博 河嶋 孝 杉山 明 高山 茂 永岡 健右 藤沢 全

前田 禮子 真邊 一近 宮本 晃 茂木 勲 山田 正雄 Joseph Blute

《実行委員》

菊地 善太（兼任） 戸村 知子 宮西 直子 安田 保

＊実行委員は、上記を中心として、日本大学大学院 総合社会情報研究科 文化情報専攻の院生、修了生一同が、その任に当たります。

2001 年度会計報告

国際融合文化学会各位

下記に、2001 年度の国際融合文化学会の会計報告を致します。

【2001 年度 国際融合文化学会 収支報告】

前年度繰越金				
前期繰越金	\336,000			
歳入				
学会費徴収	\295,000			
		内訳	人数	小計
		\2,000	24	\48,000
		\3,000	17	\51,000
		\30,000	3	\90,000
		繰越分	(1)	\6,000
		寄付金	2	\100,000
	小計		46	\295,000
大会費徴収	\705,200			
		内訳	人数	小計
		5月京都大会	22	\143,000
		10月京都大会	25	\286,200
		3月静岡大会	22	\276,000
	小計		69	\705,200
収入合計	\1,000,200			
歳出				
大会費支出	\931,569			
		内訳		小計
		5月京都大会		\145,175
		10月京都大会		\511,056
		3月静岡大会		\275,338
	小計			\931,569
事務経費	\2,480			
支出合計	\934,049			
来期繰越金	\402,151			

以上の通りです。

2002 年 5 月 12 日 会計係 菊地 善太

2001 年度会計監査報告

五十嵐は、2001 年度の当学会の収支報告書につき、2002 年 6 月 13 日に、これに関連する領収書をチェックした。そして、同報告書は 2001 年度の学会活動に伴う現金の収支を、適正に表示していると認めるものである。

国際融合文化学会
監事 五十嵐 雅郎

編集後記

皆様、こんにちは。編集委員の菊地です。学会誌も、ニューズレターも、ようやく発行できてほっとしています。ニューズレターの発行が滞り、役員報告と会計報告が遅れたことをお詫びいたします。

今号は、春の第四回大会の内容も含むことになったため、結果として 8 ページに及ぶニューズレターになりました。学会発表については、これまで発表者名とタイトルの紹介だけを報告していましたが、もっと発表内容について知りたいというご要望を会員の方からいただき、今号では、前回大会の当日配布プログラムに載せていた、発表要旨の予稿を掲載しました。予稿を読み返すと、沼津大会の記憶が脳裏に蘇ってきます。いずれも素晴らしい発表でした。今度の第五回大会もまた、素晴らしいご発表が聞かれるものと楽しみにしています。

学会誌の発刊も、今回ご案内できたことを嬉しく思っています。これで、皆様の研究成果を発表できる場が、大会、学会誌と、より幅が広がりました。さらに英語能公演など、会員の、人類の平和に貢献することを願う活動を、今後とも皆様とともに応援していきたいと思っています。

私は、今春、事務局長代行という身に余る大役を拝命いたしました。自分は微力ですが、一緒に頑張ってくれる事務局の仲間とともに、精一杯頑張っていきたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。10 月に堺の町で皆様に会えることを楽しみにしています。

編集委員 菊地 善太